

はじめに

JEPIX (Environmental Policy Priorities Index for Japan) 公表に当たって、当初において環境格付研究 (2001-2003) の一環として資金援助を頂いた科学技術振興機構 (JST)、その後、21 世紀 COE プログラムの一部として研究推進を継受して下さった文部科学省をはじめ、環境省、経済産業省、およびスイス連邦環境庁 (BUWAL) などの関係する皆様に、まず深甚なる感謝とお礼の言葉を述べ、ここにチームメンバーを代表して一言ご挨拶申し上げたい。

JEPIX は、1970 年代にミュラー＝ヴェンクによってスイスで提唱され、30 年以上の経験の蓄積により、いまや世界の環境先進国の「共有財産」となっている、環境希少性 (ES: EcoScarcity) 概念と手法に基づく、ホーリスティックな「統一的环境影響評価システム」である。

「統一的」とは、文字通り、EIP (Environmental Impact Point: 環境負荷単位) という、たった一つの単一評価単位 (Single Unit) によって、すべての環境負荷を測定することを意味し、これは企業を取り巻く、すべてのステイクホルダー (利害関係者) にとって、非常に使いやすい手法を意味する。

JEPIX は、文字通り、TOPIX のようなトレンド指数として、企業の環境経営度を知りたい企業内外のすべてのステイクホルダーが容易に利用できる、便利なツールと期待される。

JEPIX は、これまでエコロジー簿記、エコバランス、ライフサイクル分析、ライフサイクル・アセスメント (LCA)、環境パフォーマンス評価 (EPE)、環境会計、エコ・マネジメント会計、エコロジー会計、環境経営指標、エコラベリングなど、(ステイクホルダーに概念上の混乱を引き起こしつつ) 種々様々な名称で呼ばれていた、企業に関連する環境影響評価手法や制度のほとんど全部に深く関連し、そのおよそすべてに容易に適用可能なフレキシブルなシステムである。

わが国ではこれまで、国立・民間の研究所や諸大学・企業の関係者の皆様の、自然科学的厳密性を重視する、あるいは何らかの形式での膨大なアンケート調査を基礎とする、多大で貴重な研究のご努力とご尽力にも関わらず、残念ながら、便利で使いやすい環境影響評価システムの開発が、必ずしも順調に行われたとは言い難い面も見られた。今回それを (環境希少性 Environmental Scarcity: ES という「迂回路」あるいは「近道」によって) 可能にしてくれたのが、スイス、サイナム社前代表で、現在は法政大学人間環境学部助教授 (国際基督教大学 (ICU) 社会科学研究所研究員) の学究クロード＝ジーゲンターラー氏である。

私は JEPIX 開発プロジェクトのチームリーダーになっているが、私の仕事は、環境格付研究統括リーダーの福島哲郎氏と、より直接的には環境経営格付機構の辻健氏との密接な連携のもとに、チーム組織編成、資金調達、広報 PR、支援団体募集、ワークショップ/シンポジウム開催などをすることであり、実質的にもっとも重要な研究開発は、主としてジーゲンターラー氏の献身的努力の賜物と言える。実に、ジーゲンターラー氏こそ、わが国に環境希少性概念に基づく実用的環境影響評価手法を実現させた真の立役者なのであり、その貢献は言葉に尽くせないほどのものである。

余談と言っては失礼になるが、ジーゲンターラー氏は 2002 年夏、JEPIX 完成に向けて最後の困難な詰め作業に入るところで、皇居において天皇皇后両陛下に拝謁の栄に浴し、JEPIX に集約される環境影響評価の社会的重要性について御進講をして、とりわけ美智子皇后から深い理解

と共感を頂いた（『産業と環境』誌 2003 年 8 月号参照）。この得がたい機会が、ジーゲンターラー氏のわが国企業の環境経営推進への熱心なコミットと傾倒に、いっそうの拍車を掛けたことは、もはや言うまでもない。

そしてまた、日本側研究スタッフ諸氏の多大なる御尽力と貢献も、まことに特筆に値するものである。熊谷敏博士（武蔵工業大学）、篠塚英一氏（新日本環境品質研究所）および永山綾子氏（株式会社 山武）の 3 氏は、ジーゲンターラー氏を実に絶妙のタイミングと粘り強い継続性をもって最後までサポートした、JEPIX 完成へのいわば陰の立役者である。この日本側研究スタッフの収集した情報の正確さと目的適合性こそが、今日の JEPIX の信頼度を根底から支えていると考える。また、スイス、サイナム社の葛西洋子氏は日本とスイスの間の密接な連携を、行き届いた細やかな心配りによって可能としてくれた。さらに ICU を卒業してザンクト・ガレン大学大学院で研鑽を積む中村玲未氏も、日本語への専門的「翻訳」に当たって多大な貢献をしてくれた。

もともと JEPIX は英文で起草され、その正文は英文なので、なお若干だが翻訳調がのこる部分があることを、お許し頂きたいと思う。JEPIX は最初からわが国とスイスの間の国際協力事業としてスタートしたが（後にアメリカとドイツの研究者が参加）、さらに、ヨーロッパ各国主要企業での JEPIX と同様のシステム開発と実施実績を受けて、当初より、国際比較が容易に可能となる「国際環境会計」システムとして構築されたので、各国の研究者や企業関係者の便宜を考え、当初から英文で書かれたわけである。

JEPIX は、完全無償で、いわば環境経営ワールドの共有財産（公共財）として、希望するすべての企業にネット（www.jepix.org/）で常時無料で公開される。

すでに、イニシアティブとしての JEPIX シンポジウム以来、先見性ある環境経営を推進するわが国企業の中には、企業内での戦略経営への JEPIX 利用、JEPIX 準拠の環境会計・環境パフォーマンス評価実施、さらに JEPIX の環境報告書掲載などへの着実な歩みが進展している。そして、そのための実行組織としての JEPIX フォーラム（第 1 次、第 2 次および第 3 次フォーラム）が結成され、着実にその活動が実施されている。今後、JEPIX によって、新しい環境マネジメント、環境格付そして国際環境マネジメント会計のフロンティアが、ここに豊かに拓かれることを願ってやまないものである。

2006 年盛夏

トトロの里八国山の寓居にて

JEPIX フォーラム会長

環境経営学会副会長

国際基督教大学（ICU）教授

宮 崎 修 行